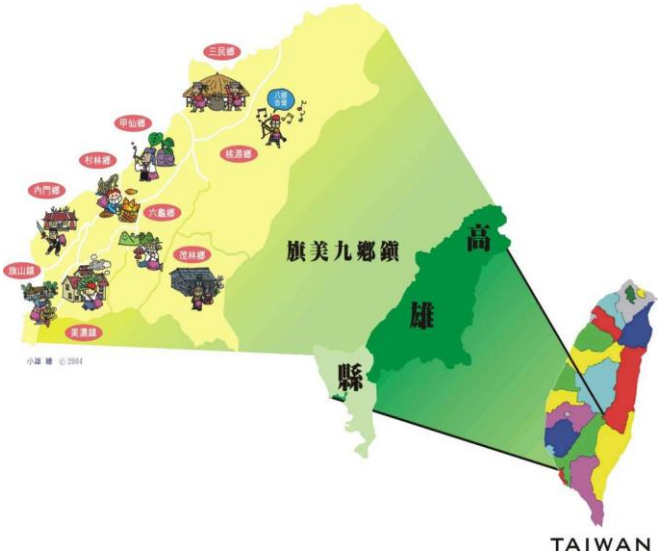
災害社会と非営利組織
―八八水害と旗美社区大学を例として―

台湾・高雄旗美社区大学主任　張正揚

本稿は、2011 年 1 月 16 日に神戸で開催された被災地市民交流会シンポジウム「台湾・中越・神戸それぞれの災害・そして復興―」で行われた報告に基づいてまとめたものである。（会場通訳：陸超　整理・文責：垂水英司）

１．台湾最初の農村型社区大学―「旗美社区大学」

台湾の高雄市旗美地区から来ました張正揚です。まず、私のフィールドである旗美地区について簡単に紹介します。現在の高雄市は、昨年 12 月 25 日旧高雄市と高雄県が合併し、面積 2,950km² の新たな高雄市に生まれ変わりました。旗美地区は新しい高雄市域の 3 分の２を占める、広大な農山村地域です。人口は約 14 万５千人で、閩南系漢族、客家系漢族、原住民族（布農族、魯凱族、南鄒族、平埔族等）など多様な族群（エスニックグループ）に分かれます。

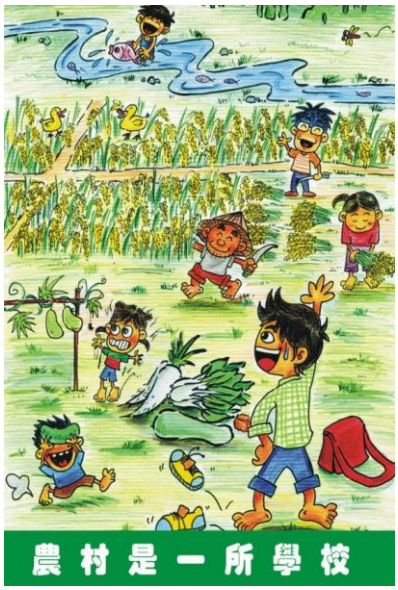


次に、私が所属する旗美社区大学について紹介します。日本の皆さんには馴染みがないかも知れませんが、台湾では民間が提唱して政府部門と協働して進めてきた社区大学運動というコミュニティ学習・教育活動があって、すでに 10 年余の歴史があります。1998 年台北市の文山に最初の社区大学が設立されたのですが、現在では百近い社区大学が、知識の普及や公民社会の建設を目指して全台湾に展開しています。こうした社区大学はそれぞれ独立した組織で、多くは都市部で活動しています。政府からの補助はありますが、基本的には民営で運営をしています。

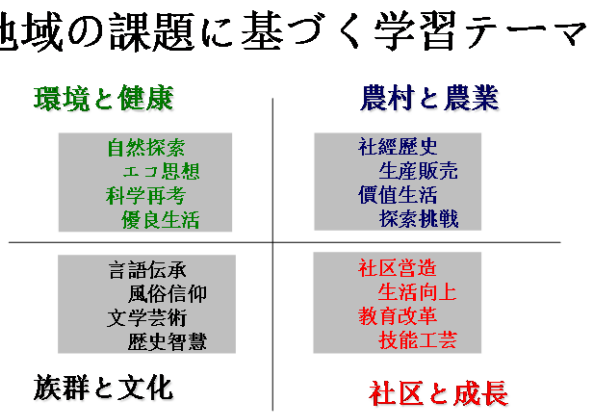
旗美社区大学は、2001 年 3 月に旗美地区に設立したのですが、農村部で創立した最初の社区大学といえます。旗美社区大学は（財）鐘里和文教基金会が設置し、美濃愛郷協進会の幹部を招いて運営を任せたのです。鐘里和文教基金会は、郷土出身作家鐘里和にちなんだ財団法人で、台湾で初めての平民の記念館である鐘里和記念館を設立・運営するほか、学校や社区で文学講座の開催や台湾文学の普及・研究に努めてきました。一方美濃愛郷協進会は、20 年ぐらい前にダム反対運動で建ち上がった組織ですが、その後もずっとコミュニティ運動を続け、地域に溶け込んで社会運動や社会教育などの活動に取り組んできまし

た。私自身も、この協進会が進めていた「若者よ、故郷に帰って働こう」という呼び掛けに応じて、故郷に戻ってこの活動に飛び込みました。このように、旗美社区大学は、ダム反対運動と教育改革運動という二つの流れが原流になって誕生したといえます。

私たちの社区大学では、いま農村の学習運動を推進しています。というのは、農村ではさまざまな資源や情報が不足しており、このままではこれまでの閉鎖性がますます加速する恐れがあります。農村の復興過程においても、「人々が学習すること」が不可欠だと考えるのです。私が故郷に帰って活動をしようとした時、自分自身が故郷のことについて如何に知らないか思い知らされました。地域のさまざまな現状を知ることによって道は開けると思います。右の図は、私たちの社区大学でよく使う図です。私たちは教室の中だけでは十分な学習ができません。実際の作業をする中で如何に多くのことが学べるかを実感します。まさに「農村は一つの学校」と私たちは考えています。



農村型の社区大学には、次のような意義があると考えています。一つは農村の強い学習ニーズにこたえることです。二つ目は、現在の生活に必要な地域のネットワークをつくることです。三つ目は、農村生活の知恵や伝統文化を大切にし、記録することです。そして、私たちは、地域の課題に基づいて、「環境と健康」、「農村と農業」、「族群と文化」、「社区と成長」といった 4 つの学習テーマを設定しています。



私たちの社区大学が対象とする範囲は大変広大です。そこで本校だけでなく様々な地域に出向いて学習の機会を提供するようにしています。いわば「学校の出前」ということで、出前クラスの比率は台湾の社区大学の中で最も多いのです。右表は 2008 年度のクラスに参加した人の人数・回

旗美社区大学地区別クラス参加者

種別*	地区	2008 年春期クラス	2008 年秋期クラス
一般	本部	8 班／182 人回	8 班／151 人回
一般	旗山	9 班／168 人回	8 班／162 人回
一般	美濃	8 班／212 人回	9 班／223 人回
遠方	杉林	3 班／44 人回	2 班／28 人回
特遠	内門	2 班／43 人回	2 班／61 人回
特遠	甲仙	6 班／101 人回	4 班／57 人回
特遠	六亀	5 班／86 人回	5 班／83 人回
特特遠	那瑪夏	3 班／37 人回	1 班／12 人回
特特遠	桃源		1 班／10 人回
	合計	44 班／873 人回	40 班／787 人回

数を示したものですが、遠方で開催したクラスに参加した人数は、春期が 311 人回で全体の 36%、秋期が 251 人回で全体の 32%を占めています。

また、私たちは農村が抱えている問題を解決するには、農村だけで考えていてはいけないと思っています。そこで、都市との有機的なネットワークの構築、有機農業の推進、農作業ステーションの設置、農業体験の実施、学校給食との連携などを進めているところです。

２．八八水害の被害―記録的降雨

それでは、八八水害とその復興についての話に移ります。2009 年 8 月台湾を襲った莫拉克台風は台湾の南部地域に記録的な大量の雨をもたらしました。下表の上欄は 8 月 7 日 0 時から 8 日の 23 日の 2 日間、下は 8 月 8 日の 1 日間の暦年累積雨量ですが、1 年の平均雨量（約 2000 ミリ）に相当する雨量が 2 日間で降って、多くの地点で暦年最大の降雨に見舞われた情況が見て取れます。この記録的降雨によって、673 人が死亡、26 人が行方不明、そして 195 億台湾元（1 元≒2.8 円）を超える農業損失といった大きな被害がもたらされました。

被害の具体的情況を何枚かの写真でご覧下さい。下の写真は、最も大きな被害を受けた小林村の情況です。小林村は平埔族の村で、大変文化的にも重要な村です。写真右手にあった山が大きく崩壊し、写真中央あたりにあった小林村は、ほぼ完全に土砂に埋まり、500 人近くの村民が犠牲になりました。

莫拉克

累計兩日降雨前10大

站名（地點）	降雨量（毫米）
尾寮山（屏東三地門鄉）	2113.5
上德文（屏東三地門鄉）	1951.0
御油山（高縣桃源鄉）	1731.5
奮起湖（嘉縣竹崎）	1654.0
溪南（高縣桃源鄉）	1643.5
馬頭山（嘉縣大埔）	1614.5
石磐龍（嘉縣竹崎）	1568.0
大湖（嘉縣番路）	1471.5
新發（高縣六龜）	1457.5
甲仙（高雄甲仙）	1433.0

備註：累計時間自8/7 00:00至8/8 23:00
資料來源：中央氣象局

歷年單日降雨量前10大

降雨量（毫米）	站名（地點）	時間
1397.5	尾寮山（屏東）	2009/08/08
1287.0	溪南（高雄）	同上
1267.0	御油山（高雄）	同上
1222.5	布洛灣（花蓮）	1997/08/29
1181.0	新發（高雄）	2009/08/08
1174	馬頭山（嘉義）	同上
1163.0	瑪家（屏東）	同上
1153.5	奮起湖（嘉義）	同上
1151.5	小關山（高雄）	同上
1147.0	石磐龍（嘉義）	同上

資料來源：中央氣象局　製表：記者許敏溶

大量の土砂で埋まった小林村

大量の降雨によって、山地の集落に通じる道路の多くが寸断され、また、渓流は土砂で埋まりました。下の写真は小林村の奥にある那碼夏という布農族の集落付近の情況です。

川床に臨時で作られた道路

大量の土砂で埋まった渓流

下の写真は、別の支流にあるやはり布農族の住む桃源郷の勤和村付近の情況です。

河床が土砂に埋まって 30 メートルも上昇

川床に臨時で作られた道路

次の写真は六亀郷新開村で、小林村に次ぐ被害の大きかったところです。数十戸の家屋が流され、約 40 名が犠牲になりました。

土砂に埋まった民家

なぎ倒されたバナナ畑

３．社区大学が復興支援に投入

それでは、復興の情況と社区大学の関わりについてお話したいと思います。

当初、新聞報道などで伝わったのは屏東県の浸水の情況で、高雄県（当時）の山岳部の被害状況は、なかなか外部に伝わりませんでした。政府の方にもこうした被災情況に対するマニュアルが不足しており、メディア報道を追いかけるような形の対応となりました。大きなメディアの SNG 放送(Satellite News Gathering)などによる素早い報道が、復興の進度を引っ張った形です。ただ、こうした大メディアは入るのも早かったが、退くのはさらに早かったという印象です。

私たち旗美社区大学は災害発生の 4 日後に、情報センターを立ち上げて、救済や再建の支援をすることを決定しました。8 月 12 日の夜間に会議を開いて、支援活動に関する 5 項目の決定したのです。すなわち：

１．即刻休暇を停止、勤務を回復し、すべての講師、学生たちに残らず電話をかける。

２．旗美社区大学でボランティアを募集し、各避難所の情況を把握し、被災地へ赴いて災害前後の情況をルポする。

３．把握できた情況を旗美社区大学のブログを通じて発信する。

４．被災地へ支援に来る人達を、資源、情報あるいは直接の支援を含め、根気よく仲介や調整を行う。

５．旗美社区大学は正に地元組織として、遅延することは許されない。

私たちの旗美社区大学にとって、このような災害復興支援に取り組むのは、もちろん初めてです。ブログで発信したあとは、さまざまな情報、救援物資が入ってきました。昼と夜の 1 日 2 回会議を開いて対応を協議しました。そして、私たちはボランティアを組分けして、災害後たくさん出来た仮住まい場所と連絡を取っていきました。

私たち社区大学がこうした災害救援活動に投入するについては、様々な不安もあり、又、実行する中でさまざまな問題点に突きあたりました。一つは「現場感」の欠如です。多くの被災地は交通が遮断され、不通となっていました。現地の私たちさえ直接的な情報が得られないことが多かったのです。第 2 に、社区大学が持つ限られた人員や組織で、はたして情報センターの役割が務まるだろうかといった危惧もありました。さらに、平等の原則が保てるかどうかという問題もあります。そして、被災者の中には、社会的に優勢で、現地再建のケースが多い漢民族、社会的に劣勢で、移転再建が多い原住民族があります。社区大学としてはそのどちらにより強い関心を持つのか、といった問題もありました。

こうした懸念がある中で私たちが救済活動に入っていったのは、次の 3 つの理由です。一つは、私たちの学区そのものが被災地になったことです。二つは、各被災地をまたがるようなネットワークを持っていたことです。そして 3 つは、私たちの目指しているのは公民社会の創造だということです。

４．八八水害復興の問題点は何か

ここで、八八水害の復興全体を通して、どのような問題が生じているか、簡単にお話をしておきます。

八八水害発生後、被災地には多くのボランティアが支援に入ったのですが、準備不足や組織的な対応がなく、混乱する事例もありました。一方、NPO や NGO の参加や活動についていえば、921 震災の情況と比べると及ばないと言わざるを得ません。それに対し、大きな慈善団体の介入と影響が、921 震災時に比べて極めて大きいことが特徴です。

今回も多くの寄付が寄せられましたが、中には仲介団体を飛び越えて、マスコミに発表して直接被災者に渡され、混乱を招くといったケースもみられました。又、多くの物的資源が入ってきましたが、全体調整が不足して、必要なものが必要なところに届かず、所によっては必要以上の物資が行くところもありました。

そして、今回の復興では、場所を変えて再建する例が数多く出てきたことが特徴です。特に、多くの原住民集落を遠く離れた平地部へ移転する計画がされました。しかし、これまで山地で暮らしてきた原住民族にとっては抵抗が大きく、部落に分裂を持ち込む原因にもなっています。中でも、原住民にとって大きな衝撃となったのは、災害後政府が危険と認定した範囲を「特定地区」に指定し、居住などを禁止して移転を迫るという計画を発表したことです。多くの原住民集落が特定地区に指定される候補になりました。この計画に対し、大きな反発や反対が噴出しました。また、こうした移転を強要する復興のあり方に対抗するため、台湾原住民部落行動連盟が結成されるなどの動きがありました。

「政府の特定区域指定拒絶」の垂れ幕

台湾原住民部落行動連盟の結成

さらに、原住民の一部は、特定地区の指定を拒否して現地で住み続けるための方策も試みています。下の写真は桃源郷勤和部落の例で、ちょうど昨日完成しましたのですが、集落の近くの安全な場所に建設した「避難屋」です。もとの集落に住み続け、危険な情況になった時、この避難屋に避難しようというものです。政府は認めていないのですが、支援

者や民間団体の援助を受けながら建設したものです。

避難屋（勤和集落）写真提供「勤和村就地重建發展協會」

避難屋遠景（勤和集落）写真提供「勤和村就地重建發展協會」

５．社区大学はどのような支援をしているか

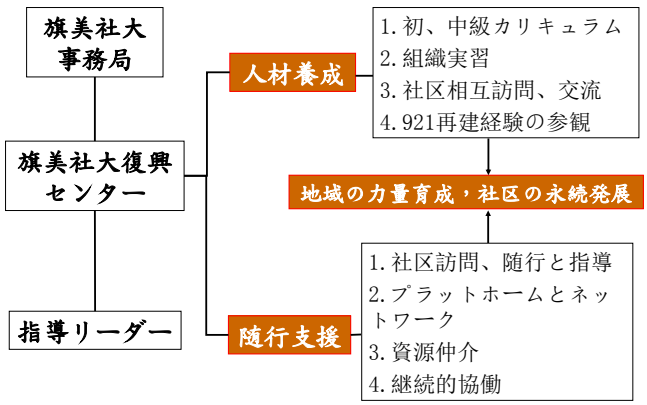
それでは、具体的に社区大学が行っている復興支援について、もう少し具体的にお話します。

社区大学は、①被災者へ関心を持ち、随行（陪伴＝お供するといった意味）と人材育成の両面から支援する　②人や物資を届ける　③問題を発見し、反映させる　④災情に応じて、課程を調整する　⑤記録を取って，刊行する　⑤復興組織を見守り、協力する、といった活動を行っています。

具体的には、社区大学の中に「復興センター」を立ち上げ、それぞれの地域について人材育成と随行支援の両面から支援をしています。ただし、あくまで地元の力量を育て、社区の永続的発展をはかることを基本に進めています。たとえば、人材育成のカリキュラムをつくる時も、社区大学が先に決めるのでなく、地域のニーズや意見に基づいて、地域自身が作るようにしています。

なんといっても、人と組織が復興の鍵です。地域ごとにリーダーとなる先生を配置し、そのアドバイスを得ながら、住民自身が活動するという形を大事にしています。下の図は、地域ごとのメンバーを示したものですが、赤枠の人たちはリーダーで、それ以外は地元の人たちです。

社区組織の人材養成と随行支援



随行支援の一つとして、「資源媒合（資源仲介）」という活動をしています。これはたとえば、地域の人たちは産品をつくることができても、なかなか販売が困難だということがあります。その場合、私たちのネットワークを生かして仲介し、様々な資源や能力を持った人たちと結合していこうというものです。右の写真は新和というところの名産の瓢箪のロゴで、社区大学が版画家に依頼して作ったものです。こうした活動は、社区大学として目指す方向の一つです。

版画家に頼んだ新和瓢箪のロゴ

また、「芸術家駐村」という活動も行っています。

これは、被災者の心のケアや様々なニーズにこたえるため、3 カ月単位で各村に芸術家を派遣・駐在してもらい、カリキュラムの進行などを助けます。たとえば、甲仙には、社区劇場の孫華瑛さん、新小林には視覚芸術の林純用さんが駐在するという具合です。

芸術家の駐村活動

６．コミュニティ組織の課題と社区大学の役割

これまでの経験を通して、いくつかの課題や展望を述べながらまとめとします。

再建に関わるコミュニティの組織についてみると、まだまだ経験不足のまま、重い任務を負わされたという問題があります。余りにも急ぐため、基本的な調査も出来なかったり、組織体質が整わず、意志疎通がうまくいかなかったり、自主防災システムの構築には積極的反応がないとか、資源配分をめぐって組織間に争いが生じたりとか、さまざまな弱点や問題点も見受けられたのです。

こうした一般の社区組織とは違って、社区大学は有利な点を持っていると考えています。社区大学は、長期にわたって講座を開設してきた関係で、地域の人たちや団体の情況を良く把握しているし、又、さまざまなネットワークも持っています。地元にいる強み、長期に取り組める強み、ネットワークを持つ強みがあるといえます。

再建は大変長い過程で、いずれ支援者は離れます。だから、実際に災害にあった人達自身が組織を立ち上げていくことが大切です。

災害は私たちに様々な学習対象があることを教えてくれました。自分たちの地域や他所の土地、心と物の救済、組織や公民社会の復興、災害を防ぎ減らしながら環境、文明を創造する、といったことです。

皆さん、ご清聴有難うございました。

張正揚（ザァン・ジョンヤン）

1970 年高雄県美濃生まれ。台湾大学機械学科で学ぶ傍ら、最初の客家サークル「台大客家社」を設立した。卒業後、故郷に戻りボランティア活動を開始、台湾社区営造の草分けの一つで、反ダム運動に取り組んだ美濃愛郷協進会の総幹事などを務め、現在も同協進会の常務理事である。2001 年には高雄県社区大学（社区大学とは民間主導で全国展開する生涯教育機関で 10 年以上の歴史を持つ）の主任秘書に就任、台湾で最初の農村における社区大学として旗美社大の設立に関わった。現在は、その旗美社大の主任を務める。八八水害後は、旗美社大内に莫拉克（モーリコット台風）復興センターを設置し、行政院文化建設委員会の社区組織再建支援チームの第 2 地区責任者を務めるなど、復興支援に尽力している。